

博士（文学） 夫馬 進氏の『中国善会  
善堂史研究』に対する授賞審査要旨

「善会」とは善举（慈善・公益事業）を目的とする結社を汎称し、その実施施設または事務所としての建造物を指して「善堂」という。明末から清末（さらには民国期）まで中国の特に先進地帯の都市において相当程度にこれが普及し発展を遂げていたことは、世界史的に見ても注目すべきことでありながら、従来とかく歴史家の眼から脱落し勝ちな分野であったことは否みがたい。一九九七年二月京都・同朋舎から出版された夫馬氏の本書は、この忘れられていた未開拓分野の研究意義を改めて問い直し、研究水準を一挙に高めた力作である。それは一〇数年にわたる研究の総括であり、学界から高い評価をもって注目されている。

まず「序章」において、一八世紀初頭のイエズス会士の書簡にまで遡るヨーロッパ人および日本人の同時代的観察と中国人自身の論説、第二次大戦中ギルド調査の側面から善堂にも言及した仁井田陞と今堀誠二、そして以後長い空白の後に一九八〇年代から現れ始めた若干の歴史学的研究まで、従来善会、善堂にどのような関心と評価が向けられたかを概観する。関心には「社会福祉」に連なる側面

と「市民社会」に連なる側面があった、また今後もあるべきだとし、前者を「人文科学的関心」、後者を「社会科学関心」と呼び、この二つの関心を縦糸・横糸として善会、善堂史を考察する、という研究姿勢を打ち出す。

第一部（第一章「善会、善堂以前」、第二章「同善会の誕生」、第三章「善会、善堂の出發」）は、善会、善堂の発生期の論述に当てられる。古来中国では、弱者救済は天子の任務と觀念されて歴代王朝それぞれに鰥寡孤独政策があり、明朝は各州県に養濟院という困窮者収容施設を官設していた。しかしこれら官の施策は効率も悪く腐敗を伴いやすかった。これと善会、善堂の間に源流・展開という連続関係は存在しない。後者の起源は明末（一六世紀末）に起こった同善会その他の結社運動にあった、とするのが著者の見解である。

同善会とは「人と与ともに善を為す」「善は人と同ともにす」（『孟子』）という格言からその名を得たもので、名士たちが相語らって、相互の切磋・親睦と対世間の教化・善举（有徳困窮者への援助等）との両面を目的として、年間数回の集会（その際に資金も持ち寄る）を持つ組織であり、万曆一八年楊東明が虞城縣（河南省）で始めてからたちまち各地に流行するに至った。それと時を同じくして、放生会（生類憐れみ）、掩骼会（無縁遺骨の収拾）、一命浮図会（飢民の救

命)、救生船(水難救助)、など多様な善擧の組織が現れ、恤接会、普濟堂、育嬰堂(いずれも後述)なども起源をこの時期に求められるが、これらと同善会とは皆な根を一つにするものであり、「生生」を標語としてたゆみなき実践を尊ぶ理念と積善の果報を希求する動機に駆られる有志者の、ある種の熱っぽさを伴った自発的行動であった。その根が儒教か仏教かを問うことは殆ど無意味であり、当時布教されていたキリスト教を要因と見ることもできないという。

第二部(第四章「清代前期の育嬰事業」、第五章「清代松江育嬰堂の経営実態と地方社会」、第六章「清末の保嬰会」、第七章「清代の恤接会と清節堂」)において視点は清代に移される。明から清へ世相が変わるにつれて善会、善堂は初期の熱っぽさを失うけれども、その故にかえって、会則を厳密化し、基本財産を持ち、役員の実任を明確にした組織体として定着するようになる。そこで善擧は実際にとどるように遂行されどれ程の成果を挙げ、または克服し得ない限界があつたかの詳細を、代表的な二つの善擧に的を絞って詳論する。史料として徵信録(後述)を活用し、それが、建前だけでない実態の把握を可能にしている。

育嬰堂とは貧家から口減らしのために遺棄される新生児(大多数は女児)を拾って保育する施設であるが、大勢の乳母(その多くは自身の赤子にも哺乳している)を雇ひ賃金を与えて収容児に哺乳さ

せるという業務が実際にどのようなものであつたかの生きたイメージは本書によつて始めて与えられたと言つてよい。大都市の完備した育嬰堂と近辺小都市の留嬰堂(暫時収容施設)が連携して田舎で発見された捨て子をリレー式に送り届けるネットワークが、時には半径一〇kmにも及んで出来ていたことを知るなどは驚きである。比較の視点も取入れて、江戸幕府の生類憐みの令との関連などにも論及されている。清末には、母に乳母としての賃金を与えて、一旦は遺棄を決意したわが子を引き取つて保育させる保嬰会という組織も出来て、育嬰堂では五〇%を超えた一歳未満死亡率がこれによつて二〇%以下に下がつたことが知られるという。

恤接会・清節堂は寡婦を再婚の誘惑から守るという理念のもとにその生活を支援する組織であり、寡婦一般ではなく特に読書人の寡婦を対象とした。在宅の寡婦に援助金を給する方式と母子ともに清節堂に収容する方式とがあり、後者は救済対象一人当たり前者の数十倍の費用を要したという。入所者は行動の自由を制限される反面に子供の教育まで含めて到れり尽せりの保護を受けていた。如何にも中国的なこの施設の実態がよく描き出されている。

第三部(第八章「善堂の官營化と善擧の徭役化」、第九章「杭州善擧連合体と都市行政、ギルドおよび國家」、第一〇章「上海善堂と近代地方自治」、第十一章「上海の都市近代化と義塚問題」)で視

点はさらに、善堂の事業内容からその組織運営上の問題と国家・社会とのかわりそして近代との接点に、すなわち「人文科学的」関心から「社会科学的」関心に移される。ここで「オフィシャル」と「パブリック」（官營的と民間公營的）の対比が思考の軸として随所で語られる。

民間公營とは「民捐民辦」すなわち民間からの寄付を原資として民間の有志・無給の理事者（その下に有給の職員を置き使用人を雇う）の手で運用する方式であり、特記すべきこととして、「徵信録」と呼ばれる事業・会計報告書を定期的に印刷配付することが早くから行われていた。このように公開原理によって神経質なまでに経理の公正さを保つ努力がなされたことは大いに評価に値する。

しかし民間公營福祉が成果を挙げると、国家もこれを奨励し、資金面などで挺入れする反面、郷紳にこれを押しつける。そうなることと理事者の地位は国家の下請けに似たものとなり、自腹を切つて赤字を穴埋めするなどの難儀を背負いこみ、誰もが嫌がるゆえに輪番制で無理にも当たらせるようにもなる。著者はこれを善拳の徭役化と呼ぶ。育嬰堂をめぐつてすでに第二部で論及されているが、官營の養濟院と事業内容の類似した民間公營の普濟堂をめぐつてこの問題を全面的に論じたのが第八章である。

第九、一〇章は清末の大都市において、多方面の公益分野を一手

に引き受ける総合的善堂ないしは善拳連合体が発達して、数名の総董（最高理事者）団の下に多数の部局を擁して現在ならば市役所が担うであろうような公益事業を行っていたという瞠目すべき事実を克明に論述する。しかも杭州では隆盛のなかにも既述の「徭役化」に似た挫折に見舞われたのに対して、上海では同仁輔元堂という総合的善堂が驚くほどに経営の安定を保ち官憲からも頼りにされて、やがては中国近代地方自治の嚆矢とされる上海総工務局（一九〇五年）の成立に連なつたという、両都市の対比と特に後者の歴史的意義を明らかにする。両都市においてあまたの同業ギルドが有力な資金源として寄付を求められはしたが、ギルドが連合して市政を掌握するような動きは全く起こらなかった。杭州については著者が当地の図書館、博物館で探し当てた三種類の第一級史料、上海については当地のほか北京等中国各地および欧米の主要図書館、博物館を博搜して得た多数の徵信録を縦横に活用して論述が成り立っている。第一章では主として当時の新聞を史料として、近代都市の機能・美観・衛生と古來善拳の大きな対象であった死者の静謐との間の価値観の衝突と推移を論ずる。

「終章」において、本書によつて従来の見解を大きく変え得たと自任する事柄、いわば著者としての思いの丈を記し、さらに付篇一「清代沿岸六省における善堂の普及情況」（地方志の記事の統計的処

理)、付篇二「徵信録というもの」(講演の再録)を加えて、全八四七頁となる。

以上のような構成と内容をもつ本書は、独自の着眼による史料の博搜とその優れた活用手法を通じて従来の具体的知識の空隙を飛躍的に埋めた点においてまずは揺るぎない価値を有する。そして中国の都市と云い自治と言えばひたすらギルドに眼が向いていた従来の研究姿勢に反省を迫ることは、本書がもたらした理論的衝撃の最たるものと言えるであろう。著者が強調して止まないのは、中国の歴史の中に、人々が協力・連携して公共事業を遂行し維持する高い能力があったという事実であり、その中核には情報公開という知恵、「徵信原理」が発達していた——ギルドもまたこの原理の上に立っていた——ことを力強く論証する。善会、善堂は本書によつて、今やこれを抜きにしては中国社会史を語り得ないものとなった。将来その研究が進むなかで本書の立論が修正される部分も出るであろう。しかし本書は疑いもなく、さような研究のために基礎を据えたという名譽ある位置づけを長く持ち続けるであろう。

## 理学博士岸 義人氏の「海洋天然化合物の有機化学的研究」に対する授賞審査要旨

岸 義人氏の一貫した研究対象は、動植物や微生物起源の天然有機化合物、特に強力な生理活性を示し、複雑な化学構造をもつ海洋天然有機化合物である。近年、核磁気共鳴スペクトロスコピーやX線結晶解析等の機器分析法の進歩により、かなり複雑な有機化合物の構造決定が可能になった。しかし、分離精製技術の向上とともに、強力な生理活性を示すが天然からは極微量しか得られない上に、複雑な構造をもち、しかもX線解析不可能な非晶質性有機化合物が次々と単離され、従来の構造決定法の限界を超えるに至った。このような状況のもとで岸氏は、有機反応を支配する新しい基本概念を提唱、確立し、この独自の方法を駆使して長年懸案とされていた多くの生理活性天然有機化合物の全合成を達成し、併せて全立体構造を解明した。これらの顕著な成果のうちで特筆すべきものを以下に述べる。

### I Palytoxinの構造決定と全合成

岸氏は、一九八〇年秋から腔腸動物毒palytoxinの化学的研究に